

前奏 黙想	祈 禱
讃美歌 30 あさかぜしずかにふきて	讃美歌 239 さまよう人々
祈 禱	献 金
信仰告白 使徒信条 566	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書 レビ記 13:45~46	黙 禱
マルコによる福音書 1:40~44	主の祈り 564
讃美歌 242 なやむものよ	頌 栄 543 主イエスのめぐみよ
説 教 『一人ぼっち、という恵み』	祝 禱 後 奏

「さて、らい病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、〔御心ならば、わたしを清くすることがおできになります〕と言った(マルコ 1:40)」。もって回った謙遜口調だが、「俺を癒してくれ」という必死の訴え。律法の規定では、彼は「らい病者」らしい身なりをして、自ら警告を発し、隔離されていなければならない(レビ 13:45~46)。だからこの場合、感染症者がやたらに出歩いてはダメじゃないかという状況。コロナ感染に戦々恐々となっている時期、マスクの不着用を裁く「自粛警察」が幅を利かせたが、自粛警察では抑えられないほど、多くの病者がイエスの許にやって来た。

「らい病者」の前後聖句をざっと眺めても、多くの病者や悪霊憑きがイエスの周りに集まっている(マルコ 1:32,39,2:3)。早朝一人で祈っていても(1:35)、弟子たちが大慌てで「みんなが捜しています(1:37)」と言って連れ戻してしまう。こうした報告を念頭にイエスの周囲を見回してみよう。留まっても、歩いていても、大勢の病者や悪霊憑きがイエスに追いつがって来る。浮かび上がる情景に、人々の切迫した思いがヒリヒリ感じられる。もう律法ではどうだとか、ゴチャゴチャ言っている場合ではない。

病者や悪霊憑きがイエスを取り囲んで、苦しい胸の内を必死に訴えている。この場面をじっと見つめていたら、ふとこんなことを感じた。集団としての熱気と興奮とは裏腹に、彼ら一人ひとり冷たい孤独の中に隔離されているのではないかと。単に「宿営の外(レビ 13:46)」という場の隔離でなく、病という「一人ぼっち」状況に押し込められている。これほど寂しく、心細いことはないだろう。

私たちは病者と共に、医療に神の御手が働き、聖霊の癒しを切に祈る。教会ではイエスや弟子のような治療行為そのものはしない。病院の午前中、たくさんの病者が往来し坐している。イエスの周りにように騒然とはしていないが、病の不安と「一人ぼっち」の冷やかさが感じられることでは同じだ。

E.フロムは「人間のあらゆる営みは、何とかして一人ぼっちの状況から脱却したいという努力である」と言った。病による苦痛自体というより、一人ぼっちの「冷やかさ」が人間を絶望させるらしい。そしてその冷やかさの底には、人間には到底抗しえない「死」がある。なぜなら、死へ赴くことは必然で、究極の「一人ぼっち」だからだ。仏教はそんな人間存在を「生老病死」と冷徹に規定する。

イエスは、追いつがるそのらい病者を「深く憐れんだ(マルコ 1:41)」。優しさゆえの同情ではない。言葉の原意は、病者の苦しみと孤独でイエスの「はらわた」がギューッと強く絞られた。はらわたがギューッと絞られる苦しみ、私たちの生涯にも幾度かは起こる。だがイエスの場合は、病者や悪霊憑き、徴税人や娼婦など、「一人ぼっち」に隔離された者すべてに、きつくギューッとになってしまう。

イエスは深く憐れみ「手を伸ばしてその人に触れた(1:41)」。幾重にも隔離されて来た(レビ 13:45~46)その人に直接手を触れる。病者はキリストの生命と呼応し合い、その命は死をも超えていく。イエスは「よろしい。清くなれ(マルコ 1:41)」と告げ、「たちまちらい病は去り、その人は清くなった(1:42)」。もう一人ぼっちではない。祭司の判定を受けて(1:44)家へ帰り、新しい命に生きることになる。

一人ぼっちは恵みなのか。イエスが御自分のはらわたを痛めて解き放って下さる、命の恵みなのだ。

思ってもみなかった自分の反応に驚くことがある 通常は理性も感情も自分自身を真似ているから自由や多様性を歓迎する私という牢獄 キリストの御手が牢獄の鍵を解く 恐る恐る創造の未知へ  
 礼拝後はお掃除、手伝える方はご参加下さい。本日 2:30~5:00 分区委員会(甲府教会)、青柳役員と牧師が出席。6/28(水)11:00~12:00 聖研祈禱会、昼食カフェあり。牧師の動き:6/27 刑務所教誨。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。